

爲法の念厚きもの幾人かある、歎かはしき事に非らずや、此處に於てか、現代青年僧侶は、大いに自覺し奮勵し、以て宗門の前途を慮かり、發展せしめざるべからず。

## 高踏超然

樋口是端

奈何にして物外に超然たる乎、身下界に存し而して心を高めて上天に登らしめ、初めて法外に逍遙するが如きは、未だ超然の道味を悟了したるものにあらず。

佛陀は王宮を出で、難行苦行十二の春秋を送つて菩提樹下に成道し給ふにあらず、久遠は始成の悟りにはあらず、肉體即法身久遠の佛なり。

我祖は上首上行にして而も彼の難に遇ふ、夫れ人は天地宇宙と体を同うし、心を法界に遍滿せしめ、壽を限りなきの時と一ならしめ、其の全身を擧げて、大虛に充塞せしむる事を得べし、之を圓

滿と云ふ。既に此地に達すれば、物に對して宜しからざる事なく、事に對して宜しからざることなし故に事業に對しては其の熱すべき時に熱し其の止むべきに止む、國家に對しては其の盡すべきに盡し、其の制すべきに制す、圓身を擧げて一隅を打つ、其の打てる時や全身の如しと雖も、全身は即ち超然として、他の諸隅の上に存しつゝ立てり。此を以て其の執着は、狂に至らず、其の熱心は痴に至らず、其の失敗は損に至らず、其の成功は驕に至らず、常に悠々として宜しく、常に洋々として迫ることなし、之れを此れ超然の形と云ふ。彼の金錢を以て、卑汚の物とし、事業を以て俗世の事とし、市にありて仙人らしく政治を談じてたゞ歌をよむが如きをのみ超然なりとせんや、彼の月光を見よ、露點々々、に圓滿の光りうつる、細波錦を織るこゝに圓滿の光うつる、洪洋漠々たりこゝに圓滿の光うつる、白瀧千丈天外より落つるこゝにも亦圓滿の光映ずるにあらずや。

——(なほり)——